

3年2組

 羊のもな・はちとの暮らし  
 ～もな・はち、そしてわたしたちの幸せを願って～


## 羊毛の汚れは、もなが生きている証

3年2組では、5月にもなから刈り取った羊毛を使えるようにする作業を行ってきました。使える羊毛と使えない羊毛に分け、お湯で油分を取り除き、洗剤で汚れを落とし、すすぎ洗いをして乾燥をさせました。1度に全ての羊毛を洗い切れないため、子どもたちは何回にも分けて作業を続けてきました。そして、ようやく羊毛をすべて洗い切りました。Aさんは袋に入った羊毛をぎゅっと抱きしめていました。そして、「お布団みたいにふわふわ」と語りました。羊毛の気持ちよさと、もなの温もり。Aさんにとっていつまでも離したくない大切なものになったのでしょう。



羊毛を洗い終えた達成感に浸っていた子どもたちですが、羊毛をクラフトに使えるようにするためには、カーディングという繊維の方向を揃える作業が必要だということが分かりました。そこで、ブラシを用いてカーディングを行いました。ブラシに羊毛を絡ませ、もう片方のブラシを用いて羊毛をとかしていきます。力がいる作業ですが、黙々とカーディングを続けていました。カーディングをすると、羊毛は今までよりももっとふわふわになりました。Bさんは、自分のグループでとかした羊毛を手にとると、それを頭に乗せ、「見てこんなにふわふわだよ」と笑いながら見せてくれました。それを見ていたCさん、Dさんも頭の上

に羊毛を乗せ、「本当だ」「軽くなった」「空気みたい」と話していました。羊毛を洗う前は、「汚い」「くさい」と、素手で触ることすらためらっていた子どもたち。ですが洗っていくうちにEさんは、「羊毛の汚れは、もなが生きている証だね」と口にしていました。自分の手で洗い、自分の手でとかしていくことで、どんどん愛着を感じていました。羊毛から、自分たちがしてきた手仕事の意味、そして、もなの命を感じる子どもたちの姿がありました。

もなの羊毛を、“見るだけで、もなと暮らした日々を思い出せるもの”にしていきたいと決めた子どもたち。置物、ぬいぐるみ、キーホルダーなど、それぞれの作りたいものを市販の羊毛で試作しています。Fさんは、「ミサンガを作りたい」といい、タブレットで作り方を調べ始めました。しかし、いきなり壁が立ちはだかります。羊毛を糸にしていかなければならなかったのです。困ったFさんは、タブレットで羊毛を糸にする方法を見つけようしますが、糸を紡ぐためには糸車などの機械が必要だということが分かりました。



そこでFさんは、羊毛を手で撚って糸にしていこうとしました。羊毛が切れないようにそっと引き出し撚っていきました。太くなってしまったら羊毛を引っ張って細くしていきました。羊毛と対話しながらの作業です。できあがった手撚りの糸は、まるで毛糸のようになりました。ミサンガを作りたいFさんにとっては、その糸は太すぎたようです。「今度はもっと細く作る方法を知りたい」と語る言葉からは、糸を紡ぐということの探究が始まっていました。

## 飼えなくならないか心配

本校では4年生に進級する際にクラス替えが行われます。そのため、2年間共に暮らしてきたもなと、昨年お迎えしたお友だちのはちを引き取ってもらうことに決めました。子どもたちが挙げた引き取り手の条件は、「2頭同時に引き取る」「名前を変えない」「離れても会いに行ける」そして、「幸せに長生きさせてくれる」の4つ。子どもたちと4つの条件に合う牧場や動物園をインターネットで探しましたが、この4つの条件に合う場所はあまり見つかりませんでした。そ

んな時、Aさんのお母さんが、飯縄でペンションを営む、仁科さんを紹介してくださいました。子どもたちに紹介すると、「仁科さんと話してみたい」という声が上がリ、仁科さんを学校にご招待して、お話をを行うことにしました。

子どもたちはお話会に向けて、「食べてはいけないもの図鑑」を作るグループ、今までの思い出を写真でまとめるグループ、もな・はちの1日の生活をまとめるグループ、お世話の仕方をまとめるグループ、そして、触れ合い方や散歩の仕方を伝えるグループの5つのグループに分かれて、仁科さんに紹介する資料作りを始めました。



そして、仁科さんとお話会を迎えました。「食べてはいけないもの図鑑」を作るグループが発表すると、仁科さんから、「キノコがダメって言われたんだけど、うちは山でたくさんキノコが生えちゃう。どうすればいいかな」と質問されました。Hさんは、「なるべく散歩をする前にキノコを取ったり、どこにキノコが多いか調べたりして近づけないようにしてほしい」と伝えていました。また、お世話グループが発表を終えると、仁科さんから、「えさはどれくらいの量を何時にあげればいいの」「お散歩は雨の日もした方がいいの」と質問されました。Iさんは、「今度それも分かるように資料にまとめて渡します」と言い、Jさんは、「雨の日でも短い時間やった方がいい。道は事前

に通って、危険がないかどうかを確かめてほしい」と伝えていました。そして、触れ合い方、お散歩の仕方を伝えるグループの発表は、実際にもな・はちと触れ合いながら行いました。Kさんが、リードのつけ方を実際につけるところを見せながら伝えていると、仁科さんはそれを見ながら、はちを撫でてくれていました。それを見たLさんは、「なんかはち、仁科さんに慣れてるね。あんなに最初から触れるなんて、仁科さんすごいね」と驚いていました。仁科さんに別れを告げた子どもたちは、「仁科さんに引き取ってもらうことは、もな・はちのこれからの幸せに繋がるか」という話し合いを始めました。



Mさん：飼う前から対策を考えてくれているから、安心できる。

Nさん：しかも、3年2組がもな・はちを大切にしてきたことを分かってくれていた。

Oさん：話していて、優しく、責任感がある人だと思ったから、もな・はちは幸せになれるはずだよ。

Hさん：いっぱい話を聞いたり、質問をしたりしてくれて、真剣に考えてくれていることが分かった。

Lさん：もなとはちと、すぐに仲良くなれていてすごかった。仁科さんなら、もなとはちも安心じゃないかな。

多くの子どもたちは、真剣にもなとはちの幸せを願う仁科さんに引き渡すことに賛成しました。しかし、Pさんだけは賛成しませんでした。Pさんは、「**仁科さんがダメなわけじゃない。仁科さんには子どももいるし、生活がすごく大変だと思う。今飼いたい気持ちが強くても、お世話ができなくなって飼えなくなるか心配**」と語りました。そこで、仁科さんにそのことを伝えると、地域ぐるみでサポートしてくれることになったこと、そして必ず最後まで飼い続けることを力強く語ってくれました。そのことをPさんに伝えると、「それなら安心」と、笑顔を見せました。

わたしははじめ、Pさんが仁科さんに引き渡すことを一度立ち止まったことに驚きました。Pさんは入学前、お姉さんが飼っていたヤギに蹴飛ばされ、動物に対して怖さを感じていました。もなを迎えた時も、もなから遠ざかり、一歩引いたところで様子を見ていました。しかし、もなと過ごすうちに、少し触れられるようになり、草を口元まで持っていき、食べさせようともしていました。動きの予測ができない動物に怖さを感じながらも、もな・はちに働きかけることで、本当に幸せになってほしいという願いをもっていったのでしょう。仁科さんに引き渡すことに立ち止まったのは、もな・はちが本当に幸せになれるのか、深く考えたかったからだと思うのです。立ち止まるということ。それは、目を背けたいことに向き合うということ。それは、とても怖いことです。しかし、その先に、本当のことがあるのではないかと気付かされました。立ち止まりにこそ、深い学びがある。子どもたちの立ち止まりを大切にしながら、残りの時間を過ごしたいです。